

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 7年 6月14日
(145号)

中之島ニュース

【事務局】 〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
事務局 古田修平
編集長 西村俊幸

「成長から永続へ」

今こそ意識チェンジのとき

白駒 妃登美 先生

(五月度特別講義より)



■外国人から見た日本人

幕末に來日した外国人の手紙や日記に次のような記録があります。「人々は楽しく暮らしており、食べたいだけ食べ、着物にも困ってはいない。家屋は清潔で、日当たりも良くて気持ちが良い」「おそらく日本は天啓を受けた国、地上のパラダイスであろう。人間が欲しいと思うものは何でも、この幸せの国に集まっている」「貧乏人は存在するが貧困は存在しない。金持ちは高ぶらず、貧乏人は卑下しない。みな同じ人間だと心底から信じる心が社会の隅々まで浸透しているのである」明治初めにはこんな記録もあります。「人力車夫たちが一人の客を巡って争わず、くじ引きで誰が客を乗せるのか決めるのに感心した。モノを盗まれたり、暴力沙汰にいたり、侮辱を受けたことは一度もなかった。何も被害を受けずに旅ができる国が世界のどこにあるだろうか」江戸時代の日本は今のよう物質的に豊かではありませんでしたが、こんなにも幸せ指数が高かったのです。

ヨーロッパでは三〇年と平和は続かなかったが、日本では二三〇年の天下泰平、科学進歩の必要はなかった(光)。身分制度については、確かに身分制度があったから、職業選択の自由はなかった(影)。しかし「家業を継ぐ」ということがあったからこそ、伝統文化工芸が絶やされることなく、継承されてきた(光)」。歴史を見るとときにはニュートラルな見方が大切であること、出来事には光と影があり、過去に起こった出来事を受け入れて、それをどう未来につなげていくか、という視点が必要だと教えてもらえたのです。

■江戸時代はエコ時代

江戸時代には「奢侈(しゃし)禁止令」が出され、民衆は、白米を禁止されたり、着物は絹ではなく綿や麻、しかもその色は三色のみで茶・鼠・お納戸色(藍)と限られていました。しかし実は人々はその中でいきいきと暮らしていた。一例として着物の色は三色限定ではありましたが、四八茶、百鼠という言葉が生まれるほど、江戸時代の人は限られた色の微妙な色の違いを楽しんだのです。

江戸時代はエコ時代とも言われるほど、持続可能な環境に優しい時代でした。しかも環境と経済発展が両立できていた。特に江戸の町においては失業率も驚くほど低かったのです。なぜそのようなことが実現できたのか、その理由としては

①循環型の経済の仕組み

ゴミを資源に変える循環型の経済ができていた。江戸時代は、ゴミがお金に変わる経済の仕組みが実現されていました。今のSDGsの活動も、道徳心に訴えるのではなく、仕組みにしなければ継続はできないでしょう。

②相互扶助の精神

江戸の人は皆、午前中は「稼ぎ(生活のため収入を得る)」に出て、午後からは「働き(奉仕)」に出た。「働く」とは目の前の人を喜ばせることでした。

■永続する社会へ

いま日本は人口も減り続けている中で、成長や拡大を考えるのではなく、永続性の方へ意識をシフトチェンジせねばと私は思います。そのヒントは江戸時代の商いにある。世界に五千数百家ある2000年企業のうち、半数以上は日本の会社です。日本には一〇〇〇年企業がいくつもあります。これほどの永続性を誇る国はほかにはなく、二〇〇年企業のほとんどは江戸時代から続いています。これからの日本はグローバル化を進めるのではなく、国際化を目指さねばならない。国際化は、それぞれの国、それぞれの民族が固有のものを大切にすること。それぞれ互いに固有のものを尊重し、大切にしてゆくことこそが国際化であり、これから必要なことだと考えています。

江戸時代からの商いの永続性の理由は主に4つあります。

①ものづくりのレベルが最高。

日本人にとっては、ものづくりは神様に捧げる仕事のため、手を抜くことなどせず、見えないところにも魂を込める。

②巧みな仕組みづくり。

他所の専門分野に入らず、仕事を分け合っていくため、共倒れせず、共に繁盛する仕組みになっていた。

③人材育成の素晴らしさ。

子どもにも不条理を経験させる。

④経営者の精神性の高さ。

江戸時代の経営者は、自分の商売繁盛ではなく、「諸国客衆繁盛」を祈りました。その意味は、全てのお客様、自分以外のすべての人の幸せを祈るということ。

時代が変わったとはいえ、これらをどうこの令和の御代で活かしているのか。何ができるのか。そのヒントにしていただけだと

(抄録 中川千都子)

《グループ討議》 白駒妃登美先生

Aグループ

・ ニュートラルな視点でみる（光と陰）

・ 粹と野暮

・ 真の国際化

Bグループ

・ 素直が一番大事

・ 歴史には裏表（光と陰）がある

・ 諸国客衆繁盛

Cグループ

・ 自分の機嫌は自分でとる

・ 粹と野暮

・ 諸国客衆繁盛（自分以外全ての人の繁盛）

Dグループ

・ 素直

・ 粹と野暮

・ 雨の日の友達

Eグループ

・ 物事には光と陰がある

・ 粹か野暮か

・ 身分制度からの手工業の発達

Fグループ

・ 台湾の人たちの想い（温かい支援）

・ 諸国客衆繁盛（全ての人のために祈る）

・ 不条理さを経験させておく

「諸国客衆繁盛」→すべての人の繁栄

「粹と野暮」

「光と陰」

の意見が多数ありました。



総合司会 町田豊彦塾生



講師紹介 南場結香塾生



グループ討議風景



今回も白駒妃登美先生が懇親会にご参加いただきました！

人間学塾・中之島 読書会

Bグループ

○テキスト 「一語一会」5月

○指導 近藤 宏枝 世話人

○進行 西村 俊幸 世話人

○参加者 25人



五月二日

五分の時間を生かせぬ程度の人間に、大したことはできぬと考えてよい。

五月九日

仕事をする上での最大の秘訣は、思い切って着手するということです。「とにかく手をつける」ということ。すなわち即今着手にありと言ってよいでしょう。

五月十日

次に大切なことは、一度着手した仕事は一气呵成にやっつけるということです。と同時にいい意味での拙速主義と言ってよく、仕上げはまず八十点級というつもりで、とにかく一気に仕上げるのが大切です。

五月二十一日

実践が出来ないのは叡智がまだ真に透徹していない証拠です。というのも叡智が真に透徹したら、実行せずにいられないからです。

五月二十三日

心願をもって貫かねば、いかに才能ありともその人の「一生」は真の結晶に至らぬ。

Aグループ

○テキスト 「ありがとうございます」151～170

○指導 中川 千都子 代表

○進行 山路 直美 世話人

○参加者 25人



(四) 無限の無限の 安らぎが一杯

151

人生の真の目的は、本心開発（真実の悟り）です。何事をしていても、本心開発に繋がらないものは、間違った道に迷い込んで、時間の無駄遣いをしているのです。一刻も早くそのことに気付かなければならないのです。

162

今どのような運命・境遇・環境に置かれていても、本心の心（謙虚な心・感謝の心）を生きようとすれば、すべてをプラスにプラスに受け入れていくことができるのです。

169

いかなる七難八苦といえども、観世音菩薩の名号を一心に唱え続けられれば、必ず消滅するのです。最高の祈りの言葉「ありがとうございます」を一心に唱え続けてゆけば、必ず観世音菩薩・本心の自分・神さまが輝き出て来て心の闇を消し去って下さるのです。

「人間は身心相即的存在」
寺田一清先生が深く関わった読書会の親交を目的とした「合同読書会」が、今年で十三回を重ねることとなり、今回の幹事読書会は「なんばたねまき読書会」「感恩報謝たねまき読書会」が大阪の地で開催して下さいました。毎回それぞれ幹事読書会の特色が出されていて感動するのですが、今回はグループごとの読書会の後に、そのグループ毎でディスカッションが行われるという初めての試みに挑戦して下さい、大いに盛り上がりました。

私達のグループでは、現代の食生活にも焦点を充てて話し合いました。明治維新以来、欧米から輸入された食は、肉食が中心で私達日本人の体に合わない物が多くありました。

更にはその食の中には、一度口にすると特別に美味しいと感じる物があり、習慣化したり依存したりという症状が現れることが多々あります。それだけではないで、毎日のように食べることににより、集中力が散漫になったり、我慢ができなくなり、切れやすくなったり、挙句には病気を発症する事もあるのです。

もちろん全部が駄目だというわけではありませんが、アレルギーや様々な疾患を持つ現在の子供達のことを思う時、日本古来の食生活に立ち戻るべきではないかと考えました。森信三先生は「身心相即」の教えを説いておられましたが、まずは「身を起す」こと、「身体」が健やかでないと「心」の充実はないのだということなのです。そして森先生の「立腰」の教えが身心共に生かされてくるのだと思いました。コロナ禍以降、子供達を取り巻く環境が大きく変化してきました。

「クロムブック」という電子機器を使つての授業にも取り組んでいます。それを使うことの意義が分らずに時代と共に流されているようにも思えるのです。森先生の言われる二〇二五年も五か月が過ぎ、私達はやるべき事をしっかりと見据えていかねばならないと、改めて考えを巡らせた合同読書会でした。

台湾の旅／八田興一氏慰霊祭に参加して

5月8日は、日本統治時代に台湾の水利事業に大きく貢献した日本人技師・八田興一氏の命日。八田氏は台湾で最も尊敬されている日本人の一人です。今年没後八三年目となる慰霊祭が南部・台南市の烏山頭ダムで執り行われ、式典には当塾常任講師の白駒妃登美先生が来賓として招かれ、私もあやかっつてご一緒させていただく機会をいただきました。

慰霊祭では、女子学生の合唱団による台湾語と日本語での「千の風になつて」の涼やかな歌声が流れ、厳肅かつ清澄な空気に包まれました。式典には頼清徳総統も参列、「私は台南市長時代は台南市民を代表し、行政院長時代は台湾社会を代表し、総統の今は政府を代表して感謝を述べさせて頂いています。八田先生のこの水は農業や工業など台湾のあらゆるものを助け続けています、しかし最も大きなものは台湾人と日本人の心を繋ぐ水として今尚、流れ続けていることです」と挨拶をされ、涙がこぼれるほど胸を打たれました。

今回、台湾を訪れ、本当にこの国は日本を長きにわたり感謝し、愛してくださっていることを実感。八田氏だけではなく先人が台湾において、わが身を顧みぬ働き、行いを実践してきたからこそでしよう。このかけがえない日台の絆を大切に思うとともに、私たちも先人に恥じない日本人として生きねば、とあらためて痛感した台湾の旅でした。

(中川 千都子)



芳信抄

中之島ニュース144号ご恵送いただき誠に有難うございます。鍵山幸一郎さんのご講話を読み、鍵山秀三郎先生が自分軸ではなく、他人軸であったことがよくわかりました。自分の身の回りにいる他人軸を教えてくれる人が、僕にもおります。祖母も母もそうでした。僕は古怪我をして介護が必要な身になりました。常に自分のことを二の次に考え、僕の事をしてくれました。でもこの僕は、まだまだ自分軸で考える人間です。修行が足りません。

母のことを坂村真民先生にお伝えすると、「母念」と書かれた葉書を送ってくださいました。幸一郎さんにとつて父親が一番大きなお手本だったのと同じに、僕にとつては母が一番大きな他人軸のお手本です。

愛媛県 桂 誠司様

上甲晃先生の『松下幸之助の教訓』読了いたしました。サインには「志あれば困難こそチャンス！」と書いていただいています。

日本の伝統精神とは何か？

日本精神の一つは「主体性を持つこと」。「衆知を集める」ということ。「和を貴ぶ」、この三つだと思ふ、と幸之助翁は仰つています。日本らしさ、日本の特色、他国と違う唯一の点と確信させていだきました。神話や十七条憲法、五箇条の御誓文とつながることをようやくわからせていただいた本となりました。

愛知県 坂部 智一様

【編集部よりお願い】

卒業文集原稿の提出のお願い

第13期卒業文集を卒業式の日に発行します。

提出期限 6月30日(月)。(厳守)

文字数 800字以内。(厳守)

《人間学塾・中之島》次月案内

◇日時 令和7年7月12日(土) 13時

◇場所 大阪大学中之島センター10階

◇講師 野本三吉先生

テーマ「出会いの人間学」



教育学者。前沖縄大学学長。20代〜30代の時期に、森信三先生に出会い、その後の生き方に大きな影響を受ける。

7月は、読書会です。

A グループは、「二語一会」

B グループは、「ありがとう」ございます

編集後記

風薫る五月の人間学塾・中之島は、常任講師の白駒妃登美先生でした。いつもながら、すばらしいお話でした。自分の機嫌は自分でとる。素直さが大切。ニュートラルな視点。歴史の光と影。粹と野暮。などなど。挙げるときりがありません。江戸時代というと、時代劇では、悪徳商人と悪徳代官。これは今の令和でもある？というより、エコの時代で相互扶助がいきなり経済もまわっていたのですね。未だに、成長成長そして拡大といわれています。人間性の拡大は大いに結構です。しかし、永続性、魂を残す時代であると実感しました。

編集長 西村俊幸